コロナショックの平等性

松橋倫久

コロナウイルスの猛威について、不謹慎だが平等だなと感じた。志村けんさんがコロナに感染して亡くなった。彼には日本の最高の医療が提供されたと推察するが、それでも亡くなられてしまった。国外でも、イギリスの首相が感染したり、チャールズ皇太子が感染したり。どこの国でも、お金持ちでも貧乏でも、権力者でも一介の市民でも、スポーツをやっていてもやっていなくても、コロナは人を選ばない。

私はそのことを感じたときに、一本の論文のことを思い出した。それは論座二〇〇七年一月号に掲載された、赤木智弘「『丸山眞男』をひっぱたきたい――31才、フリーター。希望は、戦争。」である。この論文で赤木は、自分の属している非正規雇用という下の地位に一度就いたならば、地位が固定された現代では上の身分に上がることが不可能である。しかし、戦争が起きたならば自身が上の身分に上がれる可能性が出てくると主張した。

私はこの論文を読んだときに、たとえ戦争が起きたとしても、赤木が上昇するのは難しいだろうと思った。なぜなら、戦争の被害者は権力や財産のない、赤木のような人々であることが多いからだ。上昇する前に、本人が死んでしまえばそれまでだ。しかし、今の状況はどうか。赤木が理想としていた戦争による混乱と極めて近い状況にあるのではないだろうか。就職氷河期世代が若いかどうかは議論の余地があると思うが、コロナは若い人では重篤化しにくいとされている。若い人が生き、老人が死ぬのなら、戦争よりも分が良いともいえる。コロナは若い世代にとって、ある意味チャンスであると言えなくもない。

このような発想は不謹慎だろうか。僕は聞いてみたい。赤木が今のコロナの状況を、どう見ているか。私は、精神障碍者で、仕事もしていない。基礎疾患があるので、コロナにかかれば死んでしまう可能性もあると思っている。それでも、この閉塞的な日本に大きな転換点が訪れているかもしれないと思うと、気持ちが高揚する。僕の置かれた状況もまた、赤木と同じく社会の最底辺なのだ。とはいえ、フリーターの赤木とは異なり、精神障碍者は社会の中で最底辺であるだけでなく、障碍者カーストの中でも最底辺に置かれている。そのような状況が、コロナで本当に改善されるのか、僕自身も懐疑的だ。結局は、一年後、二年後にはワクチンが開発されて、何も変わらないのかもしれない。

不謹慎かもしれないが、金持ちや権力者がコロナで亡くなれば、一種の爽快感がある。社会の底辺の人間の怨嗟だ。ざまあみろ、ということだ。本当は、そんな人間達がきちん

と生活できる社会を作り上げることが、望ましいと思う。人が人を労(いたわ)れない、心情的に他人を思いやれないという社会は、やはり変えていかなければならないだろう。そのために僕に何ができるか。社会の最底辺からできることは少ない。しかし、できることはないか考えて、実行に移していきたい。